



全天候型のトロント・イートン・センターは地好の待合場所。

年にオーブンして以来、お客が引きもきらず、現在は週150万人の地元買物客や観光客が訪れている。センターは、買物だけでなく、観光や待合の場所としても大いに利用されているが、建物の設計が少なからぬ役割を果たしていることは間違いない。

ひとつには、このショップ・ピング・センターがカナダ有数の目抜き通りとして知られるヤング・ストリートに面している、という恵まれた立地条件もあるが、成功の秘訣のひとつはやはり周辺環境と調和した設計にある。

設計を担当したザイトラー・パートナーシップ社は、まずヤング・ストリートに沿って長さ270メートルの3階建て、ガラス張りの回廊を造ることにした。この屋内道路には、樹木あり、ベンチあり、バルコニーやテラス、あるいは橋や庭、噴水ありで、まるで戸外の公園つきショップ・ピング街。

全天候型で、温度調節がされているだけ、この方がいいのかもしれない。

自然光を何倍にも利用

昨年2月、カルガリーで開催された第15回冬季オリンピック大会で、アイスホッケーやスケート種目が繰り広げられたオリンピック・オーバルがひとときわ目を引いた。

地元の建築家グレアム・マックコートが設計したこのオーバルは、3つのスケート・トラック、2つの陸上競技用トラック、2つの国際競技用ホッケー・リンク、それにサエイト・トレーニング・センターを擁する、総面積25,200平方メートルの巨大な卵形建造物だ。カルガリー大学の構内において、訓練中のスポーツ選手の状態を大学のスポーツ・コンピューター・センターで把握できる。

オーバルは、自然光を利用できる建物としては、世界でも最大の部類に入る。建物を取り巻く窓々の下に、宇宙を飛行したスカイラフでテストされた反射光棚が設置されていて、内部へ入る自然光の量を増やす役割を果たす。窓はまた、リンクがあたかも屋外にあるかのような錯覚を与える。

オーバルは、その規模にもかかわらず、高さは周辺の建物と同じぐらいしかない。しかも、巨大な屋根があたかもカットされたダイアモンドにも似て、空から見るとカルガリーの風景にきれいに溶けこんでいる。荒涼として静寂な北極には、また北極ら

しい建築が必要だろう。イグルーリク島に建てられた、鉄とファイバーグラス製の北極研究所が、ひとつの解答を示してくれる。研究所はきのこの形をした2階建てで、一階は出入口、収納庫、機械室、研究室などとなっている。厳しい気候条件に合わせて、断熱スラブ、ファイバーグラス強化プラスチック板などの新しい材料が使用されているだけでなく、北極の伝統的な住宅ともいえるイグルーに似せて、幾何的な美しい線を強調したのも大きな特徴だ。

インディアンの伝統を継承

太平洋沿岸には、一部の建築家から“最もカナダ的”といわれている建築物がある。ブリテイッシュ・コロンビア大学の構内から太平洋に向かって建つ、太平洋沿岸インディアンの宝物殿ともいえる民族博物館だ。世界的な建築家アサー・エリクソンによるこの博物館は、歴史的なインディアンの文化の伝統を守って、林の中に建てられている。床から天井まで広がる窓からは遠くに太平洋や日没が臨める。柱と梁を強調したのも、かつての太平洋沿岸インディアンの建物を彷彿させる。



ブリテイッシュ・コロンビア大学の民族博物館

サフディは、この建物を、それぞれ独特の性格と空間性をもった一連の小さいパビリオンからなるものとして構想した。美術館を訪れる人たちが、展示された作品を気持ち良く観賞できるようにするためである。公共のスペースは、美術館や博物館に通じる通りや回廊のように活気に満ちた、祝賀的なムードをだしているが、展示場は美術品そのものが関心の中心になるように静かな雰囲気を出している。

自然光や空間をうまく採り入れたこの美術館では、宗教彫刻、グループ・オブ・セブンの絵画、イヌイットの彫刻、最近のピデオ芸術といったカナダの美術作品を中心に、世界各地の作品が展示されることになっている。館内には、劇場や図書館、構堂、セミナールームなども備えられている。

新しい空間経験を与える 国立美術館



首都オタワのオタワ川とリドー運河が交差するあたりに、ガラス張りのコロネード（柱廊）と幾何学的なネオゴシック風の塔が一際目立つ建物が建っている。

国際的な建築家モジュー・サフディが設計し、昨年5月にオーブンをしたカナダ国立美

術館だ。

近代建築の型にはまらない、さまざまな空間経験の調和的組合せともいえるこの建物は、外観はもちろん、内部の配置も事務所ビルを転用した旧国立博物館とは雲泥の差がある。